

吉田樹生 (東京大学大学院・日本学術振興会特別研究員 DC1)

shige.mountain.linguistics@gmail.com

要旨: シンハラ語では狭い焦点 (narrow focus) を焦点助詞や語順によって標示することができる。これらの標示にどのような違いがあり、どのように使い分けられているのかは、言語にどのような情報構造上の概念が反映されているのかを知る上で重要な問題である。しかし、標示方法間の違いはシンハラ語の研究では明らかにされてこなかった。そこで本研究では、対比される要素の種類と談話的關係に基づく二つの対比性 (Repp 2016) に注目して、実験によりシンハラ語の焦点標示手段の違いを分析する。具体的には、WH 疑問文、選択を伴う WH 疑問文、訂正を伴う極性疑問文に対する返答をする実験を行い、返答として現れた標示方法を分析する。そしてシンハラ語では、談話的關係に基づく対比性が焦点標示方法の選択に関与するということを主張する。さらに、焦点助詞と右方移動の關係は焦点タイプによって異なることを議論する。このように焦点タイプを分けて議論することは実験的データに基づくことで可能になった。

1. はじめに

- シンハラ語はスリランカの公用語の一つで、印欧語族インド・アーリア語派に属する言語である
- シンハラ語では動詞以外の単一構成素をドメインとする狭い焦点 (narrow focus) を表す手段が複数ある (Henadeerage 2002; Chandralal 2010)
 - 主動詞が動詞接辞 *-e* で終わるとき、狭い焦点が同一の節中にある必要がある
 - このとき音調に加えて、① 無助詞、② 焦点助詞 *=yi, tamaa, tamayi* によって標示すること、③ 無助詞で焦点要素が動詞直後に現れること (右方移動)、④ 助詞と右方移動の組み合わせが可能
 - そのため疑問文 (1) に対して、*-e* が現れる答えには (2)–(5) のパターンが可能である

(1) *pirimiya monaa=də bonn-e?*
man what=Q drink.NPST-E
 ‘What does the man drink?’

(2) *pirimiya koola bonn-e.*
man cola drink.NPST-E
 ‘The man drinks cola.’ (① 無標示)

(3) *pirimiya koola {=yi/tamaa/tamayi} bonn-e.*
1SG cola {=FOC/FOC/FOC} drink.NPST-E
 ‘The man drinks cola.’ (② 助詞)

(4) *pirimiya bonn-e koola.*
man drink.NPST-E cola
 ‘The man drinks cola.’ (③ 無助詞と右方移動)

(5) *pirimiya bonn-e koola {=yi/tamaa/tamayi}.*
man drink.NPST-E cola {=FOC/FOC/FOC}
 ‘The man drinks cola.’ (④ 助詞と右方移動)

- 焦点に関する他言語の研究では焦点の種類によって標示方法が異なる傾向が知られている (Hartmann & Zimmermann 2007; Bianchi & Bocci 2012; Cruschina 2021 など)
 - 特に対比性が異なる焦点は、しばしば異なる標示を受けることが知られている (Repp 2010; 2016)
 - Repp (2016) では**対比される要素の種類**と**談話的關係**に基づく二つの対比がまとめられている
 - **対比される要素の種類:** 対比される要素 (の集合) が明示的か (*ExplAltSet*, *ExplAlt*)、非明示的か (*ImplAltSet*)

*本稿に関する内容については以下の方々から有益なコメントをいただいた: 伊藤晴苗、内原洋人、佐近優太、鈴木唯、谷川みずき、長屋尚典、仁科陽江、林真衣、宮岸哲也(敬称略)。実験に協力していただいた話者やサバラガムワ大学のスタッフに感謝を表す。本研究は JSPS 科研費 JP20K13095 (代表: 宮岸哲也)、JP23KJ0748 (代表: 吉田樹生) の助成を受けたものである。

- **談話的關係:** 文の間の関係によって対比性は段階的に強くなる (質問-返答 = 類似 < 反対 < 訂正)
- 言語毎にどのような対比性が標示の違いに関与するかは異なると指摘されている (Repp 2016)
- 今までに議論されている言語よりもシンハラ語は多くの随意的手段をもつため、これらの手段がどのような要因によって選択されるのかを知ることは焦点の研究にとって重要な事例を提示する
 - ①-④ は真理条件的意味の違いはないと言われてきた (Henadeerage 2002; Slade 2011)
 - Yoshida (2022) はコーパスに基づき、焦点助詞 *tamaa/tamayi* の使用と右方移動の有無にはトレードオフの関係があることを指摘した
 - =yi は *tamaa/tamayi* とは異なり右方移動との組み合わせがされやすい (Yoshida 2022)
 - しかし、表面的な分布についてはコーパス調査からわかっているが、そもそもどのような要因によって焦点助詞や右方移動が選択されるのかはいまだ不明である。
- 本研究では、シンハラ語において対比が焦点標示にどのように関わっているのかを明らかにする
 - 対比性の関わりをみるためには文脈を統制する必要があるため実験を行う
 - 絵を示しそれに関連する質問をする実験により、様々な種類の焦点文を収集する
 - その焦点文を分析し、どのような手段がどのような焦点の種類を標示するのかを示す
 - そしてシンハラ語における焦点標示は談話的關係に基づく対比性の影響を受けることと、焦点助詞と右方移動の関係は焦点の対比性によって異なることを議論する
- 本稿の構成は以下のとおり:
 - 第 2 節: 本研究が行なった産出実験の調査方法を述べる
 - 第 3 節: 実験の調査結果を示す
 - 第 4 節: 調査結果に基づきシンハラ語における焦点標示について議論する
 - 第 5 節: 本稿をまとめる

2. 調査方法

- 絵を提示してそれに関する質問に答える実験を行い、回答を録音して分析した

2.1. 実験参加者

- サバラガムワ大学学生のシンハラ語話者 31 名 (平均 22.7±0.7 歳、女性 30 名、男性 1 名)
- 全ての参加者から書面による同意を得た

2.2. 実験刺激

- 各実験刺激は絵と質問文の音声により構成された
 - 対比的場面を提示するため、Skopeteas et al. (2006: 142–148) によって開発された絵の中から 8 種類の絵を利用した
 - 「飲む」「食べる」「持つ」「投げる」「運ぶ」「叩く」「押す」「見る」の動作の絵を用いた
 - この絵は、一つの動作につき、二人が別々のものに動作を行っているものと、一人が動作を行っているものの二つがある
 - 明示的対比要素をもつ焦点をたずねるときに二人の絵、非明示的対比要素をもつ焦点をたずねるときに一人の絵を使用した
 - この他に、「食べる」「持つ」「投げる」「運ぶ」「叩く」「押す」「見る」の計 8 動作がある
- 8 つの動作に対して、事前に録音した 6 種の目標質問文と 2 種のダミー質問文をつけることで、計 64 種類の実験刺激 (8 つの動作 × 8 種類の疑問文) を作成した。
 - 音声の録音にはコロンボ近郊に在住の話者 1 名の協力を得た

- 6 種類の目標質問文は焦点構成素の文法関係 (主語、目的語)、焦点タイプ (新情報、選択、訂正) の条件がそれぞれ異なる
- (6)–(8)に例示した主語焦点をたずねる質問文は、それぞれ引き出す焦点タイプが異なる
- これらの焦点タイプは、対比される要素の種類と談話的關係の対比に関して異なる (表 1)

(6) 新情報焦点を引き出す疑問文

kawudə koola bonn-e?

who cola drink-E

‘Who is drinking the cola?’

(7) 選択焦点を引き出す疑問文

kawudə koola bonn-e? [gəhæniya]=də? [pirimiya]=də?

who cola drink-E woman=Q man=Q

‘Who is drinking the cola? The woman or the man?’

(8) 訂正焦点を引き出す疑問文

[pirimiya]=də koola bonn-e? [gəhæniya] neweyi=də?

man=Q cola drink-E woman NEG=Q

‘Is [the man] drinking the cola, not [the woman]?’

表 1. 対比に関して異なる三つの質問文

	新情報	選択	訂正
対比される要素	非明示	明示	明示
談話的關係	質問-返答	質問-返答	訂正

- 新情報焦点を引き出す疑問文では対比される要素が非明示的であるのに対して、選択焦点や訂正焦点を引き出す疑問文では対比される要素が明示されている
- 談話的關係の観点からは、訂正焦点を引き出す疑問文と訂正を含む答えの間の談話的關係は、新情報焦点と選択焦点を引き出す疑問文と答えの談話的關係よりも強い対比性をもつ
- これらに対する答えに含まれる焦点の標示方法を見ることで、シンハラ語において要素の種類または談話的關係に基づく対比性がどのように標示に関わるかがわかる
- 新情報焦点を引き出す疑問文は非明示的要素との対比を想定するため、一人が動作を行なう絵につけた。選択焦点や訂正焦点を引き出す疑問文は二人が動作を行う絵につけた
- ダミー刺激は述語焦点を引き出す WH 疑問文を一人の絵と二人の絵につけたものである
- 目標質問文とダミー質問文は、時制は非過去、語順は SOV で統一した
- 64 種類の実験刺激は参加者ごとにランダム化して提示された

2.3. 調査手順

- 実験参加者には音声による実験の説明と例を提示したのち、一度練習をしてから実験を開始した
 - 実験の説明と例は、質問文の録音と同じ話者の協力により録音した音声を用いた
 - 一語ではなく完全な文で答えるように指示をした
 - 新情報焦点と選択焦点の答えと返答の例を一つずつ示した
 - Skopeteas et al. (2006) から実験に使わない絵と述語焦点を引き出す WH 疑問文を使い練習した
 - 参加者は絵を見てから音声を再生し、質問に答えたのちに次の刺激に移ることを繰り返した
- 回答は録音し、ELAN によって書き起こし、回答に含まれる助詞や語順を調査した

3. 結果

- ダミー刺激への回答や分析対象外の回答を除き 1398 例の焦点文を得た
 - 分析対象外として除いた回答には、文語シンハラ語で回答されたものや、質問から想定される構成素とは異なる構成素を焦点として標示したものが含まれる

- 文語シンハラ語は人称接辞を持つなど口語シンハラ語とは文法的に異なり、焦点標示に関しては口語シンハラ語に見られる語順や助詞のバリエーションがない (Slade 2011, 2018)
- 1398 例の焦点文のうち動詞が *-e* で終わる文が 958 例、*-a* で終わる文が 440 例現れた
 - 焦点タイプごとには、新情報焦点では 53.5% (254/475 例)、選択焦点では 71.1% (335/471 例)、訂正焦点では 81.6% (369/452 例) の回答で *-e* が含まれた
- 接辞 *-e* で終わる場合に語順や助詞のバリエーションがあるので、以下ではこの 958 例に注目する
 - 958 例中、*=yi* は 42 例、*tamaa* は 30 例、*tamayi* は 184 例に現れた
 - 958 例中、530 例で右方移動が見られた
 - 焦点タイプごとのそれぞれの標示方法の使用回数は以下の表の通り
 - いずれの助詞も、訂正焦点において、他の焦点においてよりも使われることが多い (助詞ありの割合はそれぞれ、新情報: 18.1%、選択: 17.0%、訂正: 41.5%)
 - 右方移動は、訂正焦点の標示においてよりも、新情報焦点、選択焦点の標示において使われることが多い (右方移動の割合はそれぞれ、新情報: 66.1%、選択: 77.0%、訂正: 27.6%)

表 2. 新情報焦点における焦点標示方法

	無助詞 (音調のみ)	<i>=yi</i>	<i>tamaa</i>	<i>tamayi</i>	合計
右方移動なし	48 (18.9%)	1 (0.4%)	6 (2.4%)	31 (12.2%)	86 (33.9%)
右方移動あり	160 (63.0%)	8 (3.1%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	168 (66.1%)
合計	208 (81.9%)	9 (3.5%)	6 (2.4%)	31 (12.2%)	254 (100.0%)

表 3. 選択焦点における焦点標示方法

	無助詞 (音調のみ)	<i>=yi</i>	<i>tamaa</i>	<i>tamayi</i>	合計
右方移動なし	31 (9.3%)	2 (0.6%)	7 (2.1%)	37 (11.0%)	77 (33.0%)
右方移動あり	247 (73.7%)	10 (3.0%)	1 (0.3%)	0 (0.0%)	258 (67.0%)
合計	278 (83.0%)	12 (3.6%)	8 (2.4%)	37 (11.0%)	335 (100.0%)

表 4. 訂正焦点における焦点標示方法

	無助詞 (音調のみ)	<i>=yi</i>	<i>tamaa</i>	<i>tamayi</i>	合計
右方移動なし	121 (32.8%)	16 (4.3%)	15 (4.0%)	115 (31.2%)	267 (72.3%)
右方移動あり	95 (25.7%)	5 (1.4%)	1 (0.3%)	1 (0.3%)	102 (27.7%)
合計	216 (58.5%)	21 (5.7%)	16 (4.3%)	116 (31.5%)	369 (100.0%)

- 図 1 に、焦点タイプごとに焦点標示方法の割合とピアソン残差を示している
 - マス目の大きさはそれぞれの標示方法の全体に占める割合を表している
 - 青色は当該の標示方法が予測値よりも有意に多いことを示している
 - 赤色は当該の標示方法が予測値よりも有意に少ないことを示している
- このモザイクプロットから予測値と比較した焦点標示方法の特徴が読み取れる
 - 第一に新情報焦点および選択焦点の時には、助詞なしの右方移動が特徴的である
 - 助詞がなく右方移動があるパターンが取られることが有意に多い
 - 助詞がなく右方移動がないパターンは有意に少ない
 - これらの予測値と外れた部分が、新情報焦点および選択焦点の標示を特徴づけている
 - 第二に訂正焦点の時、助詞ありの右方移動なしのパターンが特徴的である

- 助詞で標示し右方移動がないパターンが有意に多い
- 反対に、助詞がなく右方移動があるパターンは少ない
- 最後に、*tamaa*, *tamayi* での標示があり右方移動があるパターンは極めて少ない
 - 図 1 の下段で *tamaa*, *tamayi* での標示を表す部分の面積は小さく、赤色で示されている
 - これは、焦点タイプに限らず、これらの助詞で標示されているとともに右方移動もあるパターンは稀であることを表している

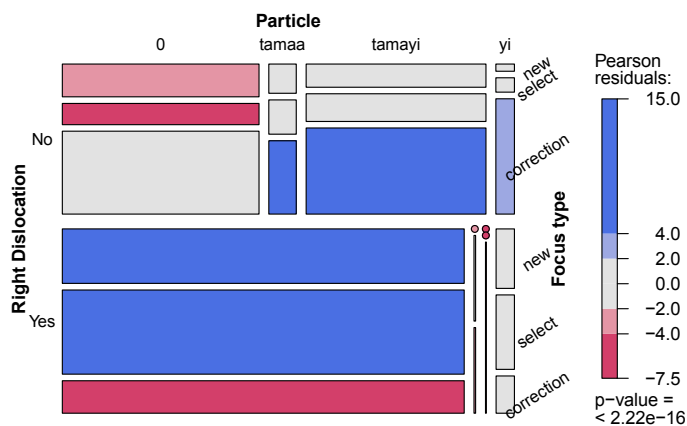


図 1. 焦点標示方法の割合を示すモザイクプロット

- なお、助詞や右方移動による標示方法の選択には個人差が大きい
 - 特に、図 2 に示すように、助詞 =*yi* に関しては個人差が大きい
 - この図では、各参加者の全ての回答における =*yi* の有無を示している
 - 一度でも =*yi* を使用したのは、10, 11, 14, 15, 20, 23, 25 の 7 名のみである
 - 世代差や地域差である可能性は考えにくく、個人差の要因は不明である
 - 実験参加者はすべて 20 代前半の学生であり代差的違いは考えにくい
 - =*yi* を使用した話者の出身地は、西部州、北西部州、サバラガムワ州であり、実験参加者全体の出身地と比較して特徴的な分布ではない

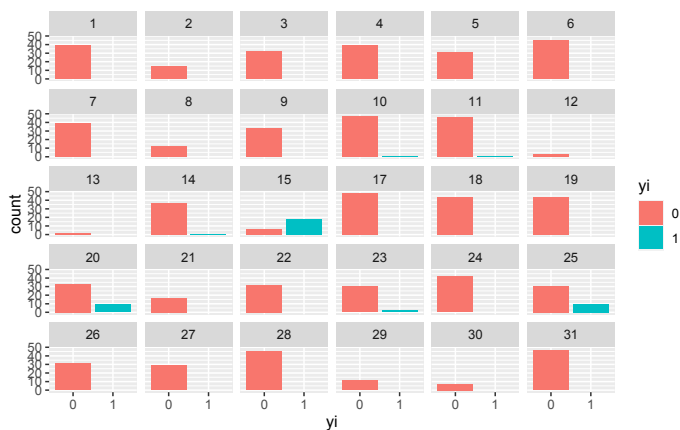


図 2. =*yi* の使用の個人差

4. 議論

4.1. シンハラ語の焦点標示における対比性

- シンハラ語では談話的關係に基づく対比性によって、焦点標示方法が異なる
 - 今回調べた焦点タイプでは、訂正焦点のみが他候補を訂正するという談話的關係を持ち、新情報焦点と選択焦点は単に質問への答えであるという談話的關係を持つ
 - 談話的關係の観点から、訂正焦点は新情報焦点と選択焦点よりも対比性が強い
- 訂正焦点は、新情報焦点と選択焦点とは異なる標示がなされる傾向があった
 - 訂正焦点は右方移動なしで表されることや助詞によって表されることが多かった
 - 新情報焦点と選択焦点は助詞ではなく右方移動で標示されることが多かった
 - このように焦点タイプによって主要な標示手段が異なっている
- 他方、対比される要素の種類に基づく対比性の影響は見られなかった
 - 今回調べた焦点タイプでは、選択焦点と訂正焦点が対比される他の候補の集合を明示し (*ExplAltSet*)、新情報焦点は対比される他の候補を明示しない (*ImplAltSet*) という違いがある
 - しかし、対比される他候補の集合の明示性において共通する選択焦点と訂正焦点が同じ標示を受ける傾向はなかった
- ただし焦点タイプと標示方法が一对一の対応がないため、対比性は意味論的意味にはなっていない
 - 訂正焦点は他と異なる標示をされる傾向があるが、標示方法に排他的関係はないため、談話的關係に基づく対比性は意味論的意味ではなく語用論的意味の一部である
 - このことは (2)–(5) の真理条件的意味は同じであるという先行研究の分析を支持する

4.2. 助詞と右方移動の関係

- 助詞と右方移動の関係について、本実験結果は先行研究の観察を部分的に支持する。
 - コーパスを用いた研究では、助詞と右方移動の標示にはトレードオフの関係があると指摘されていた (Yoshida 2022)
 - 助詞 *tamaa*, *tamayi* での標示がある場合には右方移動はされにくく、無助詞の場合には右方移動がされやすいと言われていた
- 本研究では *tamaa*, *tamayi* での標示がある場合については同様の結果を示した
 - (9) のように *tamayi* で標示される時、右方移動はめったになかった

(9) Q: pirimiya=də boolaya-tə gahanne? gæhæniya neweyi=də?

man=Q ball-DAT hit.E woman NEG=Q

‘Is the man hitting the ball, not the woman?’

A: ow pirimiya tamayi booləyə-tə gahanne.

yes man FOC ball-DAT hit.E

‘Yes, the man is hitting the ball.’ (26 番の話者、主語、訂正)

- 無助詞の場合は、右方移動に関する傾向が焦点タイプによって異なる
 - 新情報、選択焦点の場合、Yoshida (2022) の観察と同様右方移動をされる傾向がある (10)

(10) Q: kawudə meesayə tallu karanne?

who table push.E

‘Who is pushing the table?’

A: meesayə tallu karanne pirimi kenek.

table push.E man

‘The man is pushing the table.’ (1 番の話者、主語、新情報)

- 訂正焦点の場合、右方移動をする場合もしない場合もよく現れた
 - (11), (12) のように同一の話者によって両方の語順が使われた

(11) ow pirimi kēnaa kanna kesel gediyə æpal gediyə neweyi.

yes man eat.E banana fruit apple fruit NEG

‘Yes, the man is eating the banana, not the apple.’ (10 番の話者、主語、訂正)

(12) ow gəhənu lamaya puṭuwə aran enne meesəyə neweyi.

yes female child chair take.PP come.E table NEG

‘Yes the girl is bringing the chair, not the table.’ (10 番の話者、主語、訂正)

- このように焦点タイプを分けると、助詞と右方移動の関係は場合によって異なることが分かった

5. まとめ

- 本発表は実験的手法を用いて、シンハラ語の焦点標示方法がどのように選択されるのかを分析した
 - シンハラ語の焦点標示は談話的關係に基づく対比性の影響を受けることを議論した
 - ただし談話的關係に基づく対比性は語用論的意味であって意味論的意味ではない
 - 焦点助詞と語順の關係は焦点タイプによって異なることを議論した

参考文献

- Bianchi, Valentina & Giuliano Bocci. 2012. Should I stay or should I go? Optional focus movement in Italian. In Christopher Piñón (ed.), *Empirical Issues in Syntax and Semantics 9*, 1–18.
- Chandralal, Dileep. 2010. *Sinhala*. Amsterdam: John Benjamins.
- Cruschina, Silvio. 2021. The greater the contrast, the greater the potential: On the effects of focus in syntax. *Glossa: a journal of general linguistics* 6(1). 3. 1-30.
- Hartmann, Katharina & Malte Zimmermann. 2007. In place — out of place? Focus strategies in Hausa. In Kerstin Schwabe & Susanne Winkler (eds.), *On information structure: Meaning and form*, 365–403.
- Henadeerage, Deepthi Kumara. 2002. *Topics in Sinhala syntax*. Canberra: Australian National University dissertation.
- Repp, Sophie. 2010. Defining ‘contrast’ as an information-structural notion in grammar. *Lingua* 120(6). 1333–1345.
- Repp, Sophie. 2016. Contrast: Dissecting an elusive information-structural notion and its role in grammar. In Caroline Féry & Shinichiro Ishihara (eds.), *Oxford handbook of information structure.*, 270–289. Oxford: Oxford University Press.
- Skopeteas, Stavros, Ines Fiedler, Samantha Hellmuth, Anne Schwarz, Ruben Stoel, Gisbert Fanselow, Caroline Féry & Manfred Krifka. 2006. *Questionnaire on information structure (QUIS): Reference manual* (Interdisciplinary Studies on Information Structure (ISIS)). Vol. 4. Germany: Universitätsverlag Potsdam.
- Slade, Benjamin. 2018. History of focus-concord constructions and focus-associated particles in Sinhala, with comparison to Dravidian and Japanese. *Glossa: A Journal of General Linguistics* 3(1).
- Slade, Benjamin M. 2011. *Formal and philological inquiries into the nature of interrogatives, indefinites, disjunction, and focus in Sinhala and other languages*. Urbana, IL: University of Illinois at Urbana-Champaign dissertation.
- Yoshida, Shigeki. 2022. Efficient marking of argument focus: A trade-off between focus particles and word order in Sinhala. *Proceedings of the Linguistic Society of America (PLSA)* 7(1). 5223.